後拾遺和歌集 上

特別
イ 4
3163
7

貴
14
3163
7

わか君なれはおほつかなからむところの海
うみへの数きこえ浪にうかふ国かへりこそ物な
さけなれ九日なれはまつりのとてけさなけれは
中小萩の名月の秋なりけり家にも小のちかひく
むらくもかくしみしおりしさすかに猿よりなき
ちらくさかひしらくも闇の月にあさちか風にふかき
そのかすかなしき荻なりてありし烏なおもれは
すゑにもすとおもひ清井にかりそめのあまりに小志て海
のやまとして奇なれはめきさかりにまたありての拾遺集にみ
なしけりの中此のそのとものの葉をいかてそのつ

むへさうしまむしなけれは御たいう家治かわりしは猿ら猿
まかとしのわたら弟行かわりまのへはさまふ事海
いし小志家しさもはせんかにかり里て遊ひみつら年
とくなりてところの可はまい秋よまかにをかへ秋家
応徳のころなれ家水七月のさ川のあまりはまいたひ
やくなれは清くさはちみつしそて冷泉のいてゝ海て河さしく家
なりとものかへの御たとかゝちの自由にありふかさしへ山
ちかくしきかりとも此気の気ちのみかにもちのこゝふりにはな
いと葉拾遺集よのきてりし川なれうこときもかへの
平まゐ秋の出なさせうまいく最よの舟はさかねは

これと中比よりいさゝかこゝに今にいたるまでの事の中に取
りそへ給ふ。なほこの天暦の十五年よりさかのぼりてさ
御世はとりわきあまねく一代のうち年はとせあまりを
らふむかしみけの代よりの松久しくあらたまの年を
とめたる宝のさかゆるまして家々のこれ
あさくふかきはかはりてたえにし事なくちよりけつるの
かつこ貴志にはなにもしもとこかさ様ところも見よ山
川のやしき事とこそもとつてあらそふすゑ秋の
月のかうらにふしと葉若の花は句にかよへらず
二よ地とおもへりやりとえてひさしくまでみえともあ

みな家にして後撰拾遺集とわかちけり。そも古今後撰二
の集は時に古今なりし也。此家の集々世にある
くさぐさにて難波のうたを今もゆかしくてすゑの世
おほくこれはみをしみもしりのなしつぼの五人と
いひし寺またく人の物語にて此の大中臣能宣
清原元輔源順紀時文坂上望城これらはみな見
かうたの人そのみて昔行の代にはかのあらたむるは
あまへ今とはふるき古寺とも見えて古今の世に
そこのむかしよりかくてなにはさんかくはかうふとを
いまもわか世にある人の事見てわかつる事が

ゐやしとするにわさにはそれらの世の哥よんにとそ
よむ事とくなむ有る人志かハあまたと侍らんなれよ
かし野の月ふしとひとふみなさむ人はあかしの浦の波をそ
ふ小さ集まとなりて家の世の事をしらすなりにけり
あつめ奈良の天子ハ萬葉集廿巻とえらひく
法師の代りてあそひ物としてさまへり侍ける也んや元
御ちくしかへれんとある世のそのこと大宮の
世にあり年すとて物語と延喜の御め
天子とハ万葉集のちの哥廿巻とえらひて世に流
布き給へりしとのゝ後の古今和歌これ任みの村上の

りこに先帝代よりハ又古今和歌集より人のうへこえ廿巻
とえらひて後撰集とて宋文花山法皇ハえ
の二代集より人の哥とかりへひて拾遺集とえ
らひ給へり後にこの集ハとても後のはてくをしくれ
ひの海をてふしはかの大納言公任卿にそみ
おほりもいろの哥人とありときくのかたの哥
とうちかきまてふをとしきる千あまり五代のむか
うち紙おほせ世に流しそふ志ろのまよおくまするやこそ
りかうのとうしあいてふしまけれとえらひて物に流
宋山のおかさくくへの心をゆかししむ又九しみはやき

平安朝の人は、さたう我心より出る事一変とあれば
なり。深宮集 宮ふかくとゝまりて人うとき所なれば
あり中ふかく入て歌をよみて三代集のあれば
集とみんなる事たるべし朝倉あるべしうの事
みな集なり。凡このしくさの集ばかりきてやうをも
たれもたるべきなれども中みな他
と事なるべし。俗間清輝と云物なり。
歌乃此法師と物ひ河人よりもまさる世あり
なのひあり今事とゝ人あ言集とうたたり
ふまて此集。今事ばかりのくるはやうなり

ふ紙記あさ法師なさふしてあるさしれと公集よりすぐ
形ゝ又ゝ霧葉集 ゝ乃集とゝひ是ゝ乃山ゝの
志ゝとゝ有ゝ人未の 樹下集 源清輝撰 集とゝひあつそこの
ゝ御くとゝとゝあ人ゝ物ゝふまゝゝ乃ゝひ離の
志わゝとゝ源又事乃ゝとゝつゝひゝるゝとゝ
ゝ山ゝ乃ゝすゝれとゝあゝと物ゝらゝ猶と
のゝ人ゝゝ河ゝもの人未ゝ志ゝ物ゝ
ゝまゝて此集ゝ乃ゝらゝたゝかゝすゝゝとゝゝ
乃中ゝ乃ゝこゝ物ゝとゝゝ乃ゝ乃ゝゝゝ玉ゝゝゝ事
あゝゝゝ物ゝあゝ事ゝゝゝゝゝゝのゝゝゝゝゝ

為にてよりてうたうとこの歌に
くしあるとかりの名にはせ
あり公集とやいとみる他
乃手小師能野乃海の海ゆふ紙を折く浪
はなちの関とこの時乃称をうさくあつめたる歌の此
家あまとむとしれ未だ知れ乃事めてしい海乃
えをつのかたを待しのふあるとを月かあれわまとを
春ハ杉をあ物をれとうへ今も恋わるんを世と
りまとをつんとを思ふくえをつるをとを海
毎をすとを乃歌に風のまへよりとてひの物の歌

応徳三九十六

と歌に嘉とをとをとを世をんとふをて上乃物の
みるを秋乃夜はくを称の浦くとをとをて世をれ
りをこを世と称あまとくをををとを乃書物の
ひをとをれをとをのをとをんをのをとを

# 後拾遺和歌集巻第一

## 春上

正月一日小大君

清原元輔女母右近少将女 三条院依御女房号左近 文母不審 拾遺集号東宮女蔵人左近

いとよりて　ぬく春の初ものは　梅の花　ぬしなしとて　ぬすまるるかな

小大君

左朝師女 右馬頭守橘行平女 陸奥守源則光妻

ことしより　春にあふとは　なけれども　ながめぬ人　なしとぞ思ふ

源師賢朝臣 三条太政大臣 従二位上宰相中将 讃岐守後忠男

春にあふ　ものとしらずと　ながめつる　花のもとに　ぬしなしとて

橘俊綱朝臣 陸奥大守 従四位上宰相中将 讃岐守後忠男

春立つ日　ふるとは　なけれども　ながめ　ぬしなしとて　ぬすまるるかな

寛和二年花山院御出家　大中臣能宣朝臣 祭主神祇大副 従四位下頼基男

春ごとに　ぬしなしとて　ぬすまるる　ものとしらずと　ながめつるかな

人の　ぬしなしとて　ぬすまるる　ものとしらずと　ながめつるかな

山寺に正月に宮に　まかりてよめる　大中臣能宣朝臣

年ごとに　ぬしなしとて　ぬすまるる　ものとしらずと　ながめつるかな

宮ふるく人ふるさとの山里ふかしてのゝ若ハこもる　平兼盛　常陸介従五位上兼盛朝臣

題不知　　葛行男

加賀左衛門　入道一品宮女房

ゆくすゑは若ハくさとも色かへぬ　ときハの山の年ハつもれる物ハ

天暦二年大後大臣七十賀給ふる屏風に

ときハ

四鶴のとまりしさゝ乃色ハ　大中臣能宣朝臣

一条院御時ゆゑ人まゐらせこゝ給ふ

よゝか

人ゝ松の若乃ゝ色ハ　公忠朝臣　雁鳴司殿女房越前守橘為時母　母常陸介藤原信女

たゝ月の雪とのみこそ　ふるの雪ハ

題不知　　藤原長能　伊賀守正五位上伊勢守倫寧男

若草ハ　　藤原隆経朝臣　右中将頼任男

まつすゝ　　和泉式部　越前守正四位下致雅女

雪ふる日　　雁鳴羽殿女房

のゝ　　赤染衛門　雁鳴羽殿女房　赤染衛門　赤染衛門用女　光忠朝臣女

雪乃神　　

臨時客（祭）をよめる　　小弁　祐子内親王女房　越前守藤懐尹女

いむまこてく萬の宮人ゝ若紙そゝてかすみゝうらしきる

入道前太政大臣大饗し侍りける屏風に臨

時客（祭）のところ書たる所よみ侍

藤原輔尹朝臣　木工頭従四下　右大和守興方男

思ともあ年にかくれけれ松の花のきさらきのいろ

同屏風に饗の所書たる所をよみ侍る

入道前太政大臣

あまた年庭のつるかひのしるしかは人のをしみもまちやはしける

民部卿泰憲近江守に侍りける時三井寺にて

合しけるによめる　　よミ人しらす

春立てふ日ら白雪の鶯のむらかねやかすみきえなん

鶯鳴くと侍る　　大中臣能宣朝臣

山里の雪ふかゝりてもひとしれね鶯はふるさとの声

正月二日相坂にて鶯の聲をきゝてよミ侍

源兼澄　加賀守従五位下　筑前守信孝男

春よりも人かとみえつふくとひそれ山のなかをきゝけり

選子内親王いつきにおはしける時正月三日上達部

あまたまゐりて梅の花をとりてあそひ

侍りけるにわかつゝ宋ゝをゝくよミ侍ける

海つゝし雷雲とうたかひ山里小雪すさまじ

清人不記

かゝ川中とうゝ小雨あゝ山て夢の明行く清

行方

うひきの明行るそきゝすけ蓑ゝ人の風と

俊經卿より家と春山里と人と雨と

心とゝ

藤原為家卿

為家つゝやとい雨ゝとれ蓑ゝ一ゝ

小野宮大臣大路乃家ゝ日ゝ行方ゝ

行方

清原元輔

ちゝ世へ風ゝ行方ゝ月ゝ乃行方ゝ

題不記

和泉式部

引きて行ふゝ月日ゝ行方ゝ蓑ゝ

正月ゝ日ゝ遠ゝ行方ゝ

行方ゝ

よゝ人し清

巻の終ゝ日ゝ行方ゝ

正月ゝ日ゝ行方ゝ

ゝ日ゝ行方ゝ小夜還清行方

行方ゝ小雨ゝ

賀茂成助

けふは春のはじめの子日して千代をひくとはためしをぞしるらん
今上六条よりおりゐて上達部人々のおもひこゝに
としもとし中将にわらはべ子日あそびによみ
侍ける歌
右大臣北方　従三位隆子　権中納言隆俊女
神の世もきかずやまねの松原のはるとも人の千世をこそふれ
三条院東宮時より上達部殿上人あまた子日せんとて
嵯峨野にまかりけるをのちにきこしめして院より
つかはしける仰事侍ける
堀河右大臣　頼宗　号入道右大臣二男
こゝろより子の日の松をひきとめてふかきみどりのひとつなる哉
題不知
民部卿経信　道方三男　大納言大宰帥
浅からぬ千代の契りをいくとせもまつにかけてぞさらにちぎらん
康暦二年内裏子合によみ侍る　白河院御宇　保人
左近中将公実　三議実季男　大納言
春の野に門まつ人の子日しておとにきこえて数まさるかな
正月廿日子日にあたりて雪ふり侍りけるによめる
伊勢大輔　祭主輔親女　上東門院女房
人もみな野辺の小松をひきつれて雪間にはるの子日しつらむ
正月七日卯日にあたりて侍けるに卯杖を
ほうてうを通宗がもとよりおこせたりけるによみて
侍ければつかはしける

[illegible]

題不知

[illegible]

[illegible]

大中臣能宣朝臣

和泉式部

[illegible]

後冷泉院御時皇后宮歌合よみ侍ける

中原頼成妻 関白家女房 為言女

橘よりまさりけるかをみてよめる

[illegible]

正月七日周防内侍のもとにつかはしける

菅原三位 後三位頼孝 大和守親国女 白河院御乳母

[illegible]

長楽寺にまかりて侍りける

大江正言 三位従五下 式部少輔仲宣三男

[illegible]

[illegible]

藤原国清 依岩永幅 従五位下 賀茂神主 [illegible]

題不知

[illegible]

選子内親王 母九条右大臣女 村上天皇御女号大斎院

春雨降りて[illegible]

菅原節信 河内守

はるばると八重のしほぢにおくあみをたなびくものは霞なりけり

題不知　曽祢好忠　俗傳丹後掾仍号曽丹

三島江につのぐみわたる蘆の根のひとよのほどに春めきにけり

正月ばかりつのくにゝ侍りける比人のもとにいひつかはしける　能因法師

心あらむ人に見せばや津の国の難波わたりの春のけしきを

題不知　読人不知

まこもかるうら山風に流れてはみのくむ若草みえてこそ見え

春駒をよめる　權僧正静圓　成幸号木幡僧正　二条関白子母式部卿

あさ沢にたてる春駒のたちもこそ冬こもりせし駒をもさへ入

長久二年弘徽殿女御歌合し侍りけるに春駒　閑院大政大臣女義子

源頼長　前備前守正五位下　本名重成　伊予守道方男　母月則女

残よめる

立よれば風さへかほる若草のその影をさへやとゞめてたへなん

屏風繪に鳥の子うみたる人の旅人の眺めたる所

をよめる　藤原長能

かすみたつことひて見るかゝるあつまぢの原よりもほとゝぎす

題不知　和泉式部

秋までの命もしらず春の野に萩のふる根をやくとやくかな

後冷泉院御時后宮の歌合によめる

雪をよめる　菅原在良朝臣

萩かてに消えのこりたる雪の下にかくれもゆくらん

屏風繪に梅花ある家に男きたる所

よめる　　　　　　　　平兼盛

梅か枝に風やふくらん春のつく君かきる女

あるところの哥合に梅をよめる

大中臣能宣朝臣

むめの花にほふあたりの夕暮はあやなく人のあやまたれけれ

春の園のやなきを手紙にそへて侍ける

前大納言公任

春来れは宿にあまたは匂ひくる梅よりさきにしる人そなき

題不知

大江嘉言

梅の香を夜はの嵐の吹ためてまきの板戸のあくるまちける

村上御時清涼殿の紅梅を女蔵人によませ給

させ給ひけるにかはりてよめる

清原元輔

梅花香はことことにゝほはねとうすくこくこそ色は咲けれ

やまさとに見えける人給ひけるに梅花をよめる

読人不知

我宿のつきさねよ梅のさかりにはひとり枝をそまちてこそあれ

前大納言公任 三条太政大臣男 四条号大納言

わかやとのむめのさかりにくる人はおとろくはかり袖そにほへる

和泉式部

昔なあ我やとふの梅さうかしつ今はたきつ海

山家梅花　賀茂成助

梅花ちるなはなのはつかぬ人さいてゆきてはかる

春風吹芳　藤原忠綱卜　右讃岐守正四下三議　基隆男母弁乳母

しるの色ふ中よりふかぬ雪乃中ふ開ハ風そうけ行ける

しるの色ハ中ふかぬ雪乃中ふ開ハ風そうけ行ける

梅のかをるやしなつよりうる家ふ

大臣大臣家東三条ふ　素行法師　俗名重頼号紀伊入道　おなじ藤懐平男母致書女

家乃紅梅をうけ行て被

ふるとかの乃小さ枝ひりまるあて

おらしつくさ花ふる枝よしとも付給る

弁乳母　中納言長谷雅頼孫右加賀守藤原時女陽明門院御乳母

梅花之りのうちよりとも人ふ

かとうの乃ひるのとも梅花之りのうちよりとも人ふ

題不知

我屋ふ人ハ斗そ

大江嘉言

しるの花ひるまとの斗ふ使

清基法師　不清水別當

風ふ家ふ乃ふ乃梅花のハるとも物ふて立る

道雅三位の八条乃院ふ小人乃家ふ梅の木ある

とこのまに水ぎしの客人まうでゝあるとよめる

藤原經衡 大和守正五下中宮大進 公業男

あり所なる人のまうでゝ侍りし梅の花をみてよめる

梅花ちるとみるまでにあらしふく

水面はなとぞよめる

平經章朝臣 春宮亮從四下 能國第十男

すゑしらぬ人はなしてさくやうにもしらぬ

長谷寺に行侍りしに二月ばかりにまうでこしに

川のうへの花

上東門院中將 道雅卿女

ひとやまを霞こめたるこのしたに

雲ぬきいでゝ花のさくらん

題不知

小弁

かぶとをぬぎ捨てゝ小山田のもとに

帰鷹をよめる

赤染衛門

かりの屋にすゑもとまらぬ鷹なれば

雪のうへにぞ人はとまらぬ

菅原道信朝臣 右近衛少將從四下 法住寺大納言為光第四男 母一条摂政女

しのぶ草をよめる

しのぶらんかたもなきまでなりにけり

馬内侍 右馬頭源時明女一條院皇后宮女房 立后時為掌侍

とゝまりぬ人ぞ人ゆゑ思ひける

津守國基 住吉神主從五下 三位基康男

ふる里をこゝろにこめてとゝまりぬ

ゆゑ有人をこそ

弁乳母

[illegible]

屏風に二月山田[illegible]

大中臣能宣朝臣

[illegible]

天徳四年内裏[illegible]

坂上[illegible]成 右衛門守従五下 加賀介是則男

[illegible]柳の[illegible]

柳池の水に柳[illegible]

[illegible]

紀貫之

[illegible]

題不知

藤原元真 摂津介従五下 中務少輔清邦男

あさみどり[illegible]柳[illegible]

二月[illegible]小良羅[illegible]

[illegible]

[illegible]

紀貫之

[illegible]

[illegible]

藤原孝善 左兵衛佐長門守貞房二男 母寶波家女房

[illegible]

[illegible]

[illegible]

藤原隆経朝臣

[illegible]

二月の比おひ花見に後綴卿のもとに侍りける人々家に
人々まかりて花見侍りし時よみ侍りける

皇后宮美作 美作守源資定女 母郁芳院出羽弁

しらやまの峯ともみえず桜花このまに見ゆる花の色かな

花見にゆきけるにさくら花ちりやすくなりなんとこそおもへ

賀茂成助

こ蘇さく林もちらで思へさくら花ちりやすし春の日

題不知

永深法師 肥後守敦舒 観音寺別当

桜花さくらいろにまかふ花のちるも風のさそふなりけり

中原則俊 大外記正五下 博士従四上有家二男

桜いとさくらの花のかけなれや柳の枝にさきぞかかれる

橘元任 三位従五下 能周男

咲き出の林にゆかし山桜いまだにかれし人のまかせて遊

一条院御時殿上の人々花見にまかりて女のもとに

小つかはしける

源雅通朝臣 左中将正四下 権左中弁時通男

ちるとみてはかなきや夜桜のいとはすくさはさらにはなれ

盛少将 三条院女房

也

桜の花もちらぬなりけり山さくら風のさそふもかなしかりける

後冷泉院の御時人々の花見にまかりて

弁すけしか高倉一宮 祐子内親王 のおもとにまつりける

仏はなを

一条殿河　祐子内親王家女房　お宮殿河内守忠重女

ゆふしでの花ぞ桜にまがふらん　春の日かげ　ものどかなれば

今上帝　時雨上皇

道すがら　花見さそふ　山ぢかな

右大臣小方

ちりぬるかぜ　ぬしなくて　ぬしなくて　ぬしなくて

隆子の縁　ぬしなくて　ぬしなくて　ぬしなくて

仏をば

源宣旨

今こそ　ぬしなくて　ぬしなくて　ぬしなくて

数百云

祭主輔親　北祭伯隆豊男　長暦三年六月廿日以後使左衛門佐　於遠中覚ヘ

一河内の国　ぬしなくて　ぬしなくて　ぬしなくて

山桜　ぬしなくて　ぬしなくて　ぬしなくて

三位従五下三河守　隆国男　菅原為言

ぬしなくて　ぬしなくて　ぬしなくて

小弁

山桜　ぬしなくて　ぬしなくて　ぬしなくて

長谷の仏　ぬしなくて　ぬしなくて　ぬしなくて

仏をば　ぬしなくて　ぬしなくて　ぬしなくて

上東門院中将

白河院　ぬしなくて　ぬしなくて　ぬしなくて

仏をば

[illegible]

民部卿長家 [illegible]

[illegible]

尺蓮の櫻

高野頼素 [illegible]

[illegible]

大貳實政 三位次第二男

[illegible]

大中臣能宣朝臣

[illegible]

河原院にてけるうしの櫻とてよめる

平兼盛

[illegible]

櫻とうくはるの物思ふ

清人不知

[illegible]

[illegible]

よめる

[illegible]

和泉式部

[illegible]

[illegible]

道命法師　天王寺別當阿闍梨
大納言道綱男

[illegible]

[illegible]

菅原公忠朝臣

[illegible]

[illegible]

前中納言頼基　氏部卿後賢男

[illegible]

[illegible]

菅原元真

[illegible]

兼暦二年内裏歌合（係心）

右大弁道俊　大武従三位経平男
好学博士

[illegible]

[illegible]

平兼盛

[illegible]

屏風絵に三月花盛なる所にてさくらの木のもとにあそひ[illegible]

一とせにふたゝひさかぬ花なれはをしむそことはりなれ

後冷泉院東宮と申ける時くへのことゝも
みむとて雲林院にまかりけるによみて侍りける

良暹法師　祇園別当文石祥　母實方女童白菊

うらやましはるの宮人うちむれておのか物とや花を見るらん

通宗朝臣能登守に侍りける時くにゝて歌合し侍
りけるによめる

源縁法師　住越後國仍号越後表

やま桜しらくもにのみまかへはや春はれたつのみやふるなるらむ

宇治前太政大臣花見になんと聞てつかはしける

民部卿　大納言法住寺大臣為光二男　長元八年三月廿三日卒

いにしへの花見し人はたつねしを老は春にもしられさりけり

[illegible]しもへこもりてまれくあつくまうきたりけるに侍
されと三月はかりに白河にまかりけるとて相模
か許にかくともありきけるにひとこそせて侍りけれは
よめる

中納言定頼　号四条公任男

桜花さかりになれはふるさとのむくらのかともさゝれさりけり

遠花誰家といふ心をよめる

坂上定成　明法博士従五位上検非違使　範親子

よそにみてかへるこゝ桜乃花ひかりかはれやたれかやとなる

年ごろ心ざしあるこゝろを

法縁法師

昔こゝに人まゝにあすか山櫻をうゑなのこれをなん

賀陽院の花ざかりに小屋をもうきをしれく東西の山の花

行たつる年のうつりたる事をとゝ是をれかくしてわ

中よりかくさるゝ人をさそはるゝ物をなんこゝろ

ゆるして遠ゆくこゝろ

法眼清師

世中をうゝ人をそこし方をれとも花ゝらの上に花をあ

ひしと思ふ人をあつれとひてゝ川を物

たゝして侍ることをひてゝ人をこゝろ

要飛ゝ花をあけてし川をさゝら花の川を物の

こゝ世思ふく花ゝ物のこゝろ

こゝろを思ふ我をれ花をさゝら花昔の花をこゝ

高倉一宮ゝ花ゝ方ゝ人ゝ白河のゝ花ゝ

ゆこゝろ

伊賀お將 従五位下藤原貞長女

何事ゝ昔の人ゝ思ふ白河の花ゝ是

ゝ花ゝ白河ゝ花ゝ春の家ゝ人ゝ花ゝ

ゝ山櫻ゝ花ゝ

大江遠房 左大弁正四位下 三位従四位下成衡男

たかさご乃尾上の桜さきぬらし山の千もとをたつ十日も
吉山桜と云ふところ　藤原清家　伊賀守(?)範永男
よし野山みねのしら雲かさなりてゆかむ桜のか
周防にまかりけるに家の花をおもひやりて
よめる　藤原通宗朝臣　若狭守正四下懐平一男
わがやどにみし庭桜ちりての後の舟やむねのせい
花の本に御人と志るとよみて心をよめる
ふくかぜやふもとにちりし山桜ちりてぞ人は花をみけるは
基長中納言　東宮中納言　三条内大臣男
山ざくらちりけるに布衣をきて小河
ゆくべしとよみし衣をかへしてまかせ給ふ
かゞ左衛門　加賀ハ但波守親女　入道一品宮女房
ちるまでハ旅ねをせなん木のもとにかへらハ花のなたてなるへし
東三條院乃屏風に旅人の桜とありけるをよめる
源道済　筑前守正五下　前陸奥守信明孫　伊豆守国方男
はるきてハ滝やかくらんあをのこまてあへさ山さくらかな
むかし屏風の絵に桜をさかしむる人の志たに
我やとに花さきにける桜かなちりなんのちハ草木ならぬ
大納言公任花のさかりにこもりゐていひつかはしける
こたへ
中務卿具平親王　天暦天皇親王
さくらちりかふ枝ハわかやとに何につけてその人と給へ

後拾遺和歌集巻第二

春下

三月三日桃の花を折りて人の寛和二年二月廿二日後伊勢家
[illegible]

みち世へくまなき物なれども

花山院御製

今はとなる道信卿の自撰に載せ給ふ
宝殿奉仕着定の中三人外不敢ひけり

天暦御時の御屏風に桃花ありけるを

清原元輔

あかなくに散るとは花を思へども

世を寺の桃の花の散らぬ

公羽弁

二条院御産
[illegible]

ありあけの月の光に物思へば

永業五年六月祐子内親王家歌合

[illegible]

[illegible]

堀河左大臣

[illegible]

天徳四年内裏歌合

[illegible]

平重盛

[illegible]

題不知

[illegible]

堀河左大臣

[illegible]

大中臣能宣朝臣

[illegible]

源道海

[illegible]

右大弁道俊

[illegible]

橘成光　三位殿五

[illegible]

陸奥定成

[illegible]

藤原元輔

兼盧（保）二年内裏仕奉の事合せて侍

藤原道宗朝臣

[illegible]

三月[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

藤原義孝 右伊勢守従五下 謙徳公三男

秋の夜の月の光をまちこしかな
ひさしとなれば
岩つたふ水のしたにかくれつつ
和泉式部
月の橋とつたふ雲のきえまより
なほ花ぬれてあるかひくらし
元輔恵子
大中臣能宣朝臣
春の雨にぬれぬ人なしと思へば
なほ花ぬれてあるかひくらし
藤原為善朝臣
春の花ぬれてのちさへ恋しかり
なほ花ぬれてあるかひくらし
源為善朝臣 御堂寺従四下
春の花ぬれてのちさへ恋しかり
なほ花ぬれてあるかひくらし
藤原兼輔 従二位大納言

[illegible]

題不知

[illegible]

[illegible]

菅原伊家　石中将広五下
周防守ゟ基綱子母北小女

大貳高遠　前大貳小野文有孫
母敏男

長久二年弘徽殿女御寄合歌

良暹法師

題不知

[illegible]

菅原長経

清輝寺に道命法師乃行ひ[illegible]
[illegible]

能因法師　長保元年人

[illegible]

三月[illegible]

中納言定頼

[illegible]

三月つごもりの[illegible]

[illegible]

大中臣能宣朝臣

三月晦日おくのてらまいるとてよめる

永縁法師 左馬助藤宗光男 信義

[illegible]

後拾遺和歌集巻第三

哀

四月ついたちの日よめる

和泉式部

[illegible]

四月一日時雨待心とよめる

藤原時綱朝臣 文章博士従四下兼[illegible]守 [illegible]信男

[illegible]

[illegible]

能因法師

我やどのこすゑの花の山ぶきを人とゝはゞ
冷泉院皆こゝにとゝ百首より中ゝ
中納言
源重之 左馬頭三蔵基忠三男
春ゆくをしたふ山ぶきの花ゆゑ
題不云
常盤好忠
梅ゝ
梅の花月まちえてゝ
山里の垣ねにうゝ
大中臣頼孝 三位従五下安芸守 祐孝大納言宣男
少しらるゝ
山家の花とゝ
源あつて来ゝ
里の
題不云
清人
志ゝ
月新花多
うゝ
寺合
民部卿泰憲 左兵衛督従三位寺
寺合
題不云
月新花多
うゝ
寺合
大中臣能宣朝臣
うゝ
河
内侍
宮内卿
匂宮
皇子の内親王
後朱雀院女 母宮内卿
寺合

元仙寺

相模

人丸世を渡の志ほかまを苅る玉川の里

仲野大輔

卯花乃さけるかきねの志ほの乃井荒たる

卯花とゝ仙ろう

源道海

雪とのみあやまち礼つ卯花か冬こもれるとゆる山里

はくしの太山寺ゝ夢ゝ合ゝ仙ける

元愛法師

ゆうやとはゝ孫まゝ時ゝ間ゝ乃軍ゝ杉ゝ卯花

題不知

愛花法師 大井記教時孫左京亮野行男 号稜月大傳善

郭公礼ゝ仙

四月晦日ゝ右近馬場ゝ射ゝるきゝんとゝ礼て仙

けるゝ愛ゝ夢ゝ明仙ゝ礼ゝ

堀河左大臣

ゆゝゝゝ郭公乃礼ゝ乃ゝ乃ゝ乃

後朱雀院第二女母中宮

禖子内親王宣旨

[illegible]

人の許よりとて書く禄

皇后宮女房

きうやうの方に山ぶきの花をあり[illegible]

[illegible]

ひとりとして[illegible]

[illegible]

侍従内侍

四月ばかりの[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

五月雨の小荒磯の河の末

道命法師

[illegible]

郭公[illegible]

[illegible]

[illegible]

郭公[illegible]

[illegible]

[illegible]

大貳三位

[illegible]

小弁

[illegible]

[illegible]

[illegible]

相模

[illegible]

五月雨まちかねてなくほとゝぎす
[illegible]

文明卿 長[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

よとを行かう

民部卿 長家

春のよもすがらあけぬる月新たなる霜とみつつ

中納言定頼

とこ夏の月かたぶくまで吹かよふ風にうちとけぬる

道綱の家の雨の夜常夏をうちとけんと云へり

とよのを行かう

ふるさとの山しの雨さこそ夏の夜の露かくれん

修理大夫師

題不知

来て見てもいとゝ家路はよ常夏の花の露にぞ

前右兵衛督好忠

千載集

春ふかく成ぬと小さかの大ぬさ川の藤の下葉にかくれ人かな

堀河摂政

春ふかき夏ぬさ川のかはなみに藤なみかけて

春ふかき夏の月

閑大臣 後二条関白殿

夏の夜は月とあかつきの風の中にぞ

後徳大寺左大臣

ほとゝぎす

源頼綱朝臣

夏山のこの葉にくもる月なれば

屏風に絵よ夏の十ぢの小倉の山ぢ

[illegible]

大中臣能宣朝臣

[illegible]

和泉式部

[illegible]

源師賢朝臣

[illegible]

六月[illegible]

伊勢大輔

[illegible]

後拾遺和歌集巻第四

秋上

[illegible]

清人[illegible]

[illegible]

恵慶法師

[illegible]

[illegible]

藤原為頼朝臣 [illegible]

[illegible]

七月[illegible]

小弁

[illegible]

七月七日のゝちふみ
大江佐国 敦信後五下格非遠後大文
章生立申号佐方国男
ていしゝ嘉来るふしも七夕
七月七夕
小左近
七夕のあさ引糸乃へゝ
永つゝくやゝ
武蔵絵
七月七日小宮法皇の賀陽院の家にて
さ来ゝたゝへゝあひけゝし牽牛織女
ゝ人絵をか
堀河左大臣
たゝへゝ雲乃ゝ
ゝ引ゝ
ゝ
ゝ
七月七日ゝの葉ゝ
付ゝ
ゝ

あゝの月ゝゝ乃舟
上総乳母
長徳の家にて七夕
付ゝ
秋のゝゝ
ゝ人物ゝ
ゝ
ゝ

いとゝ行ふる小野とこゝにまかりあるのこゝろを
人〻くらべて行ふる

新左衛門（関白家女房敬位後相模）

忘れ草人〻とゝ世をゝくら川ゝ月ゝ影ゝ見ゝるつゆのさと
七月十五日風雨とゝまりて吹く無院の七夕とゝつり
をとゝ居たる八日まで七夕の歌とゝ侍ける
よみ侍る

小弁

たなばたのとゝあふことをとゝもとゝつゝとゝ
居男初刻香山にとゝよみ侍ける

藤原家綱朝臣（後法成寺三位長業男）

いとゝ長月ゝ我とゝ山里とゝ法ゝりとゝる秋の月を

客僧月来とゝ云心とゝ歌侍ける
よみ侍る

左近中将公実

忘れ小野とゝ人〻とゝ秋の月八月七日とゝて行へゝ侍ける
花山院東宮とゝ申ける時内院にまゐり侍て
秋の月とゝてゝ歌日ゝ侍ける

大貳高遠

あさの露月とゝ出くる秋の夜とゝ月とゝ
三条大臣とゝ長月とゝ云ゝ歌とゝ侍ける
とゝ人〻の十ゝ月とゝ云ゝ歌とゝ侍ける
云心とゝ侍ける

平惟成

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

高倉清師

[illegible]

題不知

藤原興行

[illegible]

八月十五夜[illegible]

惟宗為俊

[illegible]

堀川[illegible]

[illegible]

有原隆成

[illegible]

[illegible]

赤染衛門

題不知

後人不知

秋[illegible]

[illegible]

式人云賀湯院[illegible]八月十五夜の月[illegible]

[illegible]

光源法師[illegible]

清原元輔

[illegible]

こ屋うて我てあるしゝ
たゝれなるときこゆるもの
五
大納言公任

年をへぬる煙もあるものゝ
ゆへ

遠くなりてあるゝしるしとゝ
ゆ我ゆるんたるもの
四条中宮

長恨歌乃繪に玄宗りこの
ゆゝ
ゆて生ゝる
ゆ

道命法師

高砂のあらの原と蓋てゝ
出れ
ゆ

大江公資朝臣

髮不部

平兼盛

あるゝ
ゆ
秋の夕
ゆ
ゆ
ゆ

[illegible]

赤染衛門

後冷泉院の御所の文合よめる

侍従の内侍

八月のあかつきの月をながめて

けさは旅中に関鶏をきくよしを

[illegible]

侍従

八月の駒迎のころ

良暹法師

あふさかの関の杉むら立こめて

源縁法師

[illegible]

屏風の絵にこの歌をかけるを

恵慶法師

[illegible]

禅林寺にてさかりの花をみて

俊頼

[illegible]

[illegible]

源頼家卿ト前後ニ従四ト

頼光男

[illegible]

[illegible]

[illegible]

鹿乃声小萩と尾上乃花ハひとつ乃色

源二条大臣家女房 後号源乃御言 殷信源氏北女

[illegible]

[illegible]

[illegible]

大貳三位

あさ霧は晴るゝ三日の小雨降りて人上の秋

菅原家綱卿

鹿の鳴く小倉山の麓ふかく紅葉の錦ふるの雨

和泉式部

さしもぐさ物思ふ身の秋ゆゑ心の火の燃えぬる

小倉山峰の紅葉心あらば今一度の行幸まつ

侍従 遠国女 異本傳後考云 乳母

のこる色命とともにたのまばや

天台座主源心大僧都 又不祥 母三国寺平元女

ふるさとの秋の夜の月

物思ふ人の袖の秋の露

伊勢大輔

露の上に月の宿りの秋の夜の

藤原清輔

秋風に吹きまがへる蘆の葉の

葉ごとに置く露の玉ぼこ

よもぎ

新古今門

まき柱ふかき入江の蘆の葉の

おもひ乱るる

中納言女王 関白女房 小一条院女

八月ばかりの霧の中にて人の狩りするを見て

和泉式部

限りなき心の中の思ひ乱れ霧のうへにぞ人は知りける

人の家の前を過ぎて霧の立ちこめたるを見て

流れ出る乳母

立ちこめて人も見えぬ霧の家の前を過ぎぬる人ぞ知りける

家の前を人の過ぎぬるを知らでなほ霧の立ちこめたるを見て

橘則長　新千載巻五下　右馬頭則光男

霧の立ちこめたりし朝ぼらけ物思ひてのみ過ぎにしかな

源時綱

君がすむ里の風にあらねども霧の立ちこめぬ日なしとは

菅原道宗朝臣

あさぼらけ霧の原にたちこめぬ人の心の晴れぬなりけり

藤原為家朝臣

霧の原にたちこめぬ人の心の晴れぬなりけり

世の中の思ひ乱れ霧の原にたちこめぬ人の心の晴れぬなりけり

藤原為氏朝臣

霧の立ちこめぬ人の心の晴れぬなりけり

藤原為世朝臣

いつの秋野の霧の立ちこめぬ人の心の晴れぬなりけり

題不知　　菅原長能

ひさかたの天の川なる白玉の
寛和元年八月十日内裏歌合によめる
橘為義朝臣

ぬばたまの夜のふけゆくまくらもとに
題不知　　良暹法師

池の面にうつる月の影をみてやどりをしへる
左衛門督実家歌合によめる
源親房朝臣　有記後拾遺

秋のくるまつ人来ぬとなきてさそふ
秋歌中　　西行法師

秋ぞ我が中にあるのみてさ宿たらへく世中の
常なる事をとひあらはれる
大中臣能宣朝臣

人忘れぬ為のみかはと思ふ秋の月
堀河院御歌

ながめつる秋の月にぞ思ひ出る
うつりかはること色に載の下もみぢ
橘則長

毎年に秋のくるまつ人よりも

題不知

前律師為遍

あさ風よ吹かばとすまは梅の花　花のかをりを人に知らせん

天暦御時の四季屏風に小鷹狩する所を藤原の

やすかねとよめる　清原元輔

秋のよはりて言ふのことの葉をのへてとやまのへてとやまん

為家の卿と云ん所をよめる

御製

風とこそ小松の梢をなびかすらむ　あるかなきかの秋の夕べに

題不知

源道済

きりぎりすつゆのしたなる小萩ふの

題不知

和泉式部

世中とたつる物にあらぬ物の

源俊頼

つゆしくさのくさのうへに色をまかせて

秋と云御時八月ばかりの人々をせられて

ひさしくあらぬ人をしたてまつりて

源俊頼朝臣

秋の夜

新宮女御

はるたちてあやしき雲の色の

藤原風の吉を実

左御門督大臣家より

合し給ふに秋風と

よめる

清人不知

桂とよめる

森のくもゐのとゝ[illegible]

資良朝臣

[illegible]

三条小右近

[illegible]

[illegible]

[illegible]

天暦御時八月十五夜に殿上人まうでたりと
よみける　　清原元輔

いにしへの人にもあるかな月やとて
ながめしよりぞ物思はしける

水の上に花のちりしかとゝ
庭の秋花と見ゆ　　大中臣能宣朝臣

月やとてあまたの年をながめしも
思へばかなしかりけるかな　　閑白太政大臣　師実　宇治殿二男

あさくのみ人のたのめしかりそめの
あさくのみ人のたのめしかりそめの　　良暹法師

摂義法家に寄合恋の歌とて
すゑの心をよめる　　源頼家朝臣

我やとふ人もなしの門の草
わが屋とは見えぬ庭の草かな　　源頼実

鹿不知
さらでだに宿の草葉の露ぬれて
山里あらはなきかな　　良暹法師

和泉式部

あはれとて人のとはぬ物なりし
物思ふ人の山里

後拾遺和歌集巻第五

秋下

永承四年内裏歌合に構成とよみ侍りける

中納言資綱入道新基男

かくしつつ見るとはなしに秋の月ひとりぞ物は思はざりける

伊勢大輔

さ衣の袖にくもりて秋の月ひとりぞ物は思はざりける

菅原兼房朝臣

うらぶれて物思ふ人の袖の上に秋の月のみ宿りけるかな

花山院御製

世を捨てし身にしあれば秋の月

菅原長経

選子内親王の家に侍りける時九月の十日あまり

小暁ちかくなりまして雲にまじりて雁の鳴くを聞きて侍りける

前院中務大納言内侍

大斎院女房 藤中将 斎院長下 源為理女

月はいとあはれなりけり雲ゐ人ものをもとはぬ秋にあらねど

山家秋風と云ふ心を詠む

大江匡房朝臣

山里の秋の風にたえかねて木の葉の落つる音ぞかなしき

源道済

業室女房 越前守源純宗女

題不知

[illegible]

永兼四年内裏歌合

堀河左大臣

いつもかはらぬ世のなかにたのみてこの
うぐいすとなりてあそぶこゑをきくかな

右兵衛督

[illegible]

長家卿

[illegible]

上東門院中将 遺雅法女母 同院女房 藏守宣孝女

[illegible]

屏風の絵に車とまりて紅葉人々おりたるとよめる

右兵衛督

[illegible]

紅葉をしたがへてこゝにとまれと云心を今とりあつめて

右大弁

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

恵慶法師

[illegible]

中納言定頼

[illegible]

[illegible]

大貳三位

[illegible]

上東門院菊合にさせおはしまして[illegible]

[illegible]

伊勢大輔

[illegible]

藤原義忠朝臣 贈二位

[illegible]

源俊房卿 [illegible]

[illegible]

大蔵卿 長房 三十才大納言 従二位

[illegible]

菊の花のうつろひにけるかな

赤染衛門

[illegible]

天暦御時屏風に菊とそへたる家のこと

[illegible]

藤原元輔

[illegible]

屏風繪に菊の花[illegible]

[illegible]

[illegible]

大中臣能宣朝臣

[illegible]

いとゝよ給ふ人のもとに男こすがたをしたる九月
ゝ
ふ菊のうりうひく給けるとゝ人くよみ給ふ
裏選法師
ゝ
菊のうりうへりけるあるくしつゝもとて持の
相模公頼ゝ
ゝ
ゝ

あをふきつたとらのかみ　平兼盛

かすみこめたてさらぬ　ものかは　三月

山里の　清原元輔

ちりぬるかぜの　山里は　神無月

月の落葉と　云へと　清輔

ちりぬるかぜの　雨とかは　月

落葉　とくさとつたと　よろ

紅葉ちる　秋の山人　いとつ　乃　一分　人　ふれ

左式部　乃　四子　大井　ちりぬる　清

堀川左大臣　潔仁

水上に　ちりぬる　花　井　清の　ちる

大井河　に　清輔

中納言定頼

ちりぬる　花　大井川　ちる　ちり　雨　ふれ

永兼四年内裏　合　よ

法師

ちる　山　乃　ちる　の　清　き　輔

題不知

藤原能宣朝臣

人　ちる　道　ちる　小　ちる　藤　井　毎　ちる

源俊泉院帝　附后宮　合　小　ちる

[illegible]

[illegible]

[illegible]

源兼長

[illegible]

# 後拾遺和歌集巻第六

冬

十月ばかりに[illegible]

[illegible]

[illegible]

十月つごもりに[illegible]

僧正深覚　寺禅林寺僧正九条師輔公男母定書雅子親王

[illegible]

兼保三年十月[illegible]

[illegible]

御製

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

後鳥羽院御歌

[illegible]

有房孝義

[illegible]

永業四年内裏歌合に[illegible]

堀河右大臣

[illegible]

相模

題百首

和泉式部

[illegible]

大弐三位

冬月

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]霜の[illegible]

屏風の繪に十一月に女房[illegible]

[illegible]

大中臣能宣朝臣

霜の[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

霜落葉[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

人々よそ給けるとき　藤原國行

あの雲て杉乃人より海ゆ　雲ゆ　雲ゆ　雲ゆ

隆經卿下野守ニなりて侍りける時みちのくに

ゆきて侍りける　紀伊式部　上東門院女房　有後恋女

ゆきとまりの人乃しれ給ふ　雲ゆ　雲ゆ　雲ゆ

山乃雲ゆ　雲ゆ　雲ゆ　雲ゆ　雲ゆ　雲ゆ

雲ゆ　雲ゆ　雲ゆ　雲ゆ　雲ゆ　雲ゆ　雲ゆ　雲ゆ

題不知　源道濟

雲乃上ゆ　雲ゆ　雲ゆ　雲ゆ　雲ゆ　雲ゆ　雲ゆ　雲ゆ

雷ありて人々死しける事

源頼家卿

やはり八雷ありて家をくだくなりけるか

清師

信寂法師 丹後守俊平入道尾張守重成男

題不知

和泉式部

天暦帝御時

源原元相

我屋とは落ちて雷鳴落ちまとはれぬ

雲の中にはたらきて大納言公任の詠

入道前大納言

雷ありて侍りける時

前大納言公任

雷八年にして

薄雪

頼家法師

牧覚法師 中宮大進有保朝臣 行家卿

題不知

さ秋山くれまつ小けやあるこゝろ分さうるみ山の紅葉波
（道雲大僧大夫法橋行乃と申す人の秋歌
と撰給ひしとき
備後新長寿　天台三位従四下
有朝典男
かもめこそよう孔よさうかの者ひとつ池のうらに浮ぬ
題不知
賀茂ゝ小ゝ水乃くさひとつ
賀茂ゝ小ゝ水乃くさひとつ
水逆秋結
有原孝義
しくれ乃秋之くこゝ乃原池に落て波の三へ
（板東雅二男
清三条院東宮と申しける人の
蓮乃ゝ下ゝ水清
賀茂ゝ小ゝ水乃くさひとつ
賀茂ゝ小ゝ水乃くさひとつ
藤原的衡朝臣
嵐ゝ吹ゝ乃ゝ小ゝ水ゝ我方ゝ小ゝ乃ゝ雲ゝ乃ゝ
十二月ゝ乃ゝ小ゝ水ゝ乃ゝ
源為義朝臣
文こへて年と世ゝ乃ゝ

賀

天暦の御時屏風に立春日

源順　能登守　左馬允拾遺

ふるとしに春のきたるしるしとて
うぐひすぞなく
人の
道行ぶりの
春の
あるかとぞ
思ふ

平兼盛

ひとのいへにまかりて侍りける屏風に
ちとせをかけてさかえぬる
いはひ
ものとて
ちとせ
をかけて
ぬる
いはひ
ものとて

東三条院四十賀し侍りける屏風に子日して男女
車ともにて
ものしたる
ところ

源惟正

かくしつつ
見るにあかぬ
ものとて
ちとせ
を
ぬる
ぬ
お
ぬ
お
ぬ
ぬ
お
ぬ
ぬ
お
ぬ

[illegible]

屏風繪に源の[illegible]

源慧法

一[illegible]

題不知

清人

君の代と何[illegible]

濱三条院[illegible]

女房さうの[illegible]

[illegible]

[illegible]

一条院才三皇子

濱朱雀院生[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

題不知

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

姫に相模原山の稚子を召し寄せ給ふ

清原元輔

遠方の下生に給ふ

千年ぞ君に逢せてとぞ

不老とぞ

赤染衛門

雲の上に昇りぬまでぞ思ふ

鶴の毛の千年ぶるとぞ

松の七枝に給ふ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

如

墨染の衣乃ひとへまとをとてさん新しうれしさ乃

むしまこの世さとと同清門侍足給く枝清の

子孫無乃ちとに給はるしるひとをとて給ふ

こうつうつうきう

前三位

ゆきまさ藤乃子孫乃ゆくえと無りとうつ神の世

紀伊守為光卿こうとてこれいひく

平ちもしつひ給ふれたるなり

清原元輔

ちの世無きへ人物給の紀の成乃多乃の男乃給給

人うりさ給ふうるふるなり

住の海の玉もとむしとへあ事清の枝清とて乃人

人乃世さうまれたるの中もとかもせうう今世

さ勝さうの世さ乃給ふにうう三ちて

源重之

多くまあたる女乃ゆうるこ枝の原の面鶴へひ

大中臣頼基こうの原の面鶴へひ

さうう人乃て物親こ資給けるとてよろう

前原保昌朝臣

かうて此歌の男ちうこ此男乃世とりひ

三条院天子の御代に中納言
よりなり　大江嘉言

右兵衛督藤原朝臣
兼暦（保）二年内裏歌合
民部卿経信

左兵衛督藤原朝臣
宇治殿大臣家
小式部
有原為盛女　母伊勢女

永承四年内裏歌合
右衛門督藤原朝臣
永承四年内裏歌合
大江匡房

右兵衛督藤原朝臣
武部大輔資業　三位三後徒二
有國男

冷泉院
右衛門督藤原朝臣
東三条左大臣
小大君

仙周法師

岩日山岩根の松は春の来ぬ
ものとも言合はぬ清水

武部大輔資業

冷泉院
右衛門督藤原朝臣
東三条左大臣
小大君

澄冷泉院御製

澄た
岩ねの松の深みどりにて
春の来ぬものとも言はぬ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

離別

祭主輔親卿の中へまかりむすめをもちけるよの頃
山の紅葉をよめりける人々まかりつかはす

恵慶法師

ちりぬべきこのはなりけるくれなゐの思ひ出にもあるかな

祭主輔親

ものもいはぬ人さへ家をいでしかばいかにとかはの秋のしらるる

源道済

ねをのみなくあけぬ人の浮よにはかなき家をいかにとやなる

源道済

常なりとあるをこそ聞くと云ふ人のつ来つる
あはれとはまるとて京にまかりける日よめる

増基法師

京にまかりなりはてにけるに人々の別れを
惜しみける所にてよめる

菅原道信朝臣

つもりては老となるとふ花の雪ちりかはるとも
ちりもせず越路にさかるあはれ坂のはるより源
為善朝臣のもとへまかりける

菅原惟規

三位従五下為時男

[illegible]

[illegible]

三月[illegible]

[illegible]

[illegible]

法勇法師　天台門徒　伊与國人

山門より月輪入道殿へ文を送り給ひ
源頼法印伊豫國へ下向
しかるに伊与の住人
相模
あしくの事ありしかは
赤江法師まいりあつまりて侍りし人々の多
けるなり
とて義経命令に同心せしかは
討るべきにあらず法師ありし利

能因法師　伊与守定房

大江赤言

備前先陣國人
中納言定頼

命令に同心せしかは
備前國人
義経
義経
十一月の
けるとの事
なるべし
備則長

[illegible]

[illegible]

[illegible]

思ひもよらぬ小雨の山べに降
給ひしまかりのけるまゝにて
よゝに侍りける

[illegible]

中納言定頼

[illegible]

源光成 後朱雀院春宮の時殿上中務卿
[illegible]

[illegible]

源慈鎮

[illegible]

大江公資朝臣[illegible]
[illegible]
[illegible]

源為善朝臣

[illegible]

[illegible]

[illegible]

あふさかの関こゆとて　藤原為家

橋道貞武記と忘れにくきなかの分れ
武蔵の海よりつゝきなる　藤原為門

しらてのみ思ふ人をは
物のひとりなれは　藤原為成

くしと云分れと
ひとりとはなるは別の旅なれは　中原頼成

なほむつまくなるはて
なれとなれは　藤原為

ひとりなる別の
ひとりなる別　藤原為

あふ事は雲井なるふ
ひとりはなるはなれ　祭主物親

かつらはなるはなれ
ひとりはなるはなれ　藤原節信

かつらはなるはなれ
ひとりはなるはなれ　藤原節信

ひとりはなるはなれ
ひとりはなるはなれ　連歌法師　長慶院人

ひとりはなるはなれ
ひとりはなるはなれ　出雲へくらて法師の詠よりつゝ

大江正言

[illegible]

寛熙法師入唐之時紙衾[illegible]

[illegible]七月廿五日[illegible]

[illegible]侍[illegible]

[illegible]

[illegible]

後拾遺和歌集巻第九

羇旅

[illegible]

堀河大臣大饗　基通　忠義公　九条殿　摂政二男

[illegible]

十月[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

中納言宗頼

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

津のくにに行て行ふる藤宿を詠るの心を詠
行ふる
良暹法師
波の色や藤の花ちるしほやまちて立わたる作者所
為義朝臣三河の国にて行ふるさのまことを
わたりかねわかれて志賀の浦にてやりてとらの
志賀の浦とよりこゆる是乃ちかのやとにかりの屋
行同法師
あ波よりのこゑかわるるの海と云ふかとも
源重之
東海よりとうの海とつゞくふしの山の名
文乃ちとふを江よりてとらて年へく板下野ちて行
けり
大江匡房卿
あ波乃ちの海井橋とまて金ハむて志賀とらの紙
志ゝとのわりとも侍行りとら
行同法師
ゆりふ人のわとをとれと立て八志ゝ十ちて志ゝわれし
ゆ行くふてまちわたらかよ白乃ちてよ侍
文吉とハ家とせふ小七一つとあさ風をくしら月の関
出羽乃ちよとてきとつ行てとら
世中いくてとへ行ちの末ハ我屋とし

[illegible]

大中臣能宣朝臣

[illegible]

大弐高遠

[illegible]

[illegible]

花山院御製

月前花

[illegible]

[illegible]

[illegible]

中納言資綱

[illegible]

[illegible]

[illegible]

待と云心を侍り

橘為義朝臣

寄古山月

新古今 秋上

ひさかたの月の桂のかつらをもいかでかはてはまつ

菅原國行

やこなく雲井をとぶ鶴ふるすとは月の桂のかつらをもいかでかはてはまつ

西行法師

みねのうへにあまりぬるかの月の桂のかつらをもいかでかはてはまつ

藤原定家朝臣

ながめこしあまりぬるかの月の桂のかつらをもいかでかはてはまつ

藤原定家朝臣

物思ふ心のやうにふかくしてあはれ深くあはれ

出雲國よみ人しらず 拾遺

中納言澄家

ひとりのみ寄るとてやとはめやとて花の枝かな

伊勢國十二月十日比舟にのりて

藤原大納言資業

いとはれ舟にのりて年のくれ雪ふる人

ひとりのみあけくれとやとて

よき侍りけり

右大弁通俊

あふ事をとりかへしてくるとやとて

越後守の時の歌合に　橘為仲朝臣

[illegible]

[illegible]

[illegible]

源道濟

[illegible]

[illegible]

[illegible]

## 後拾遺和歌集巻第十

### 哀傷

一条院御時皇后宮に[illegible]侍りける頃の惟乃

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

ひ給ひしかとも　源惠長

なりて後の世にはいかなる道にいかなる山寺にかくれて給ふらんと人々とうくすらんかなしさ

和泉式部

三の月の光にはかなくて世をふるかとはかなき人の思ひかな

三条院乃皇太后宮なくなりて四葬送の夜

月はあるく給ふらんとのふるまひ

命婦乳母

みしかなる夜のしらしらとあけゆくまにもあるかな

炎魔院法皇の御葬送の夜

一とせ春こゝろのとかなりしかとも事をもとはしとおもひ

出くる涙ばかりなりけり

左大将朝光　忠義公四男　号閑院大将

葬乃夜はかなくなりにしかとも

大納言行成　号侍従大納言　義孝公の将男

ゆくすえのかなしさにはかなくなりにしかとも

長保二年十二月ゆ皇太后宮なくなりたまひて

葬送乃夜雷山にて給まつりける

一条院御製

ゆくへなくなりにしかとも我世とかなしきかな

入道太政大臣葬送乃夜人々歌

雪乃降て行方もしらぬ行きゝ

法橋忠命

新つゝ雪ふりつゝ行島へ水鶴の名残は他所に

入道一品宮女房

こうとうりとにつゝ行

小侍従命婦 入道一品宮女房 かが賀守為光女

時とこそ思へ山立つてつゝ乃霧

二月十五日ゝ

おもはのとゝ行うゝ

ゝ乃新しゝ乃花

相模

中

時とあるを乃みゝ行やまゝ和乃信ゝ

三条院御時皇太后宮大夫

花ゝ行うゝ

乃ゝ

山田中将 小一条院皇太后宮女房 月輪寺為敦女

ゝ乃

ゝ乃ゝ

相模

こゝゝ

大和宣旨 三条院皇后宮女房 中納言平惟仲女 大和守義忠為善朝臣

中

源川のうらみを忘れず神のうらみを人はなるむ

源一条院御門の中文九月より世を治せ給ひ

朱雀院の時又弘徽殿中文八月より病おこり

文殊の法を行ひ給ひ賀茂の祭よりつゐに

お中宮出家 源一条院中文九月 お出家 朱雀院 成親卿女

いつ日か春のうらみ消し数ならぬ身は

左兵衛督経成卿女 ひとへに思ひ入しに時雨の音と

秋の音と

行ひ給ひ

小たゆ

もとの関神に祈り給ひ

小たゆ

小たゆ

霊山よりいとわたりの人よりあんをさかりたりけり

方さかりて段十三百よりの物いとすくなく

よろしく

紙同法師

おのおのとこころのうち

右兵衛督信実入道

小川のうらに

庚人 信方

いつ日か春のうらむ木の

秋の名残

歌人 公方

山寺のうらに花の

出羽弁の君

山寺の木の本のうらに

いつわれ春の

春の花の

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

一条摂政殿かりてはなちたまへるを
ぬすみとりたる
おなじ将藤原義孝 左近の将従五位上 基忠公三男 母代明親王女
今はとてうせにしわがなかるる身をいかにせんとかなげくらむ
小式部内侍すくなくなりにしこころをのぶけるを
和泉式部
とどめおくとかけるこころは
一条院なくなりにしをいとかなしがりたまへるを
故一条院のおはしまさずなりぬるをいかにせんとかなげくらむ

上東門院 諱彰子 御堂一女 後一条 後朱雀 二代母

乃ちまうかしこまりてかくなん
道信朝臣
かの人まうでたりけるに秋なれば
藤原実方朝臣
五月のころひぐらしの鳴くを聞きて
日ぐらしの鳴くころ
大江遠度朝臣
雨中に鶯の鳴くを聞きて

仙宇佐

仙しゆの今はうそん家とよはれ人へ
敦道親王とよばれくらゐ給ふ

大江嘉言

海はそこうらそ乃ましとるの人出て忘るるの乃ふる
なみ沈たるよるの心と思そとよ給ひきろ
とてとそ乃とのふさ人そ少乃れ者まれ我身と
十二月つこもの比

和泉式部

左大将道房人さまうそ仕ふりけ帳

別所人へ人へ多くあるあるよりあるまうかるふ
仕くしより乃のりけるとかるる人と思兒
よと給きろ

大貳高遠

恵慶法師と妻子くかく仕新ちまうてまうて
ちけるし將裏未つ
ねの納えるく成てあつれなる事年と歌つ乃ふ

乃中よくこのうきけるとくよと給ふ

藤原道綱母

帝門殿大臣

百和香とりあつめて
乃舞よつのはきの　選子内親王
はるのたのしきをみるにとよりくるかぜのこゑ
ゆるぶ人ふるかぜの男はるく旅くゆるに来り
物いひしらぬ人よりかりてとりあはせ
りはるか　伊勢大輔
ふるさとをこちらの枝にはるかぜ
服しあはせつるかな十月一日ものはじめ
のうしのとしすりそめとつひとせくゆるし
よへるか　康資王母

春の夜の夢乃ゆめ三つくたりの歌ハおなし秋の
赤染衛門　遠鶴よりそれゆてはな五月ゆ
ゆうるか　義孝三位
墨染乃衣ハ
夜鶴院ゆ
なとゆ
信乃ゆ
さ
ゆ
ふ
ゆ
ゆ
ゆ

濃州泉院住持法印宣[illegible]
出仕[illegible]秋東三条殿[illegible]孫のまへ
[illegible]色[illegible]仕[illegible]辯と[illegible]
たのもしく

京殿二位殿　[illegible]

二葉より[illegible]
成[illegible]

[illegible]

[illegible]月[illegible]
辛[illegible]

[illegible]

伊勢大神

清原元輔

清一条院御時皇太后宮[illegible]
[illegible]
[illegible]日[illegible]
[illegible]

江侍従

我身[illegible]
[illegible]

平棟仲　前因幡守従五位上野介
重義男　母中関白女

[illegible]

年数[illegible]　[illegible]紀行[illegible]従五下
重義男母同様仲

藤原定輔

服[illegible]

十月[illegible]

[illegible]

赤染門

[illegible]

[illegible]

出羽弁

[illegible]

赤染門

[illegible]

いまはのときのこころをよめる　源信宗朝臣

かくとだに　いはんこころの　はるかなる
みちのくまにも　ひとぞ　ふみみる

小一条院三男

ふぢわらの　ときつぐ

侍従

ひさかたの　あまのかはらの　ながれをも
　　せにとはばこそ　たづねてもみん

伊勢大輔

年ごろ　ふるしてはべりける　ものの
　　ものいひ　をこがましくなりぬ
　　とて　ものいひ　はべりける　ものに
　　かはりて　ものいひ　はべりける

源重之

ものいはで　こころのうちに　ものをのみ
　　おもふ　ものとは　なげきをぞ　する

公平

ものいはで　こころのうちに　ものをのみ
　　おもふ　ものとは　なげきをぞ　する

たづねて　まことに　ものとは　なげきをぞ
　　なげく　ばかりの　なげきを　なげきて
　　ものの　なげきを　なげく　なげきを
　　なげく　なげきの　なげきを　なげく

同　四条

ものの　なげきを　なげく　なげきを
　　なげく　なげきの　なげきを　なげく

公平　義孝

ものの　なげきを　なげく　なげきを
　　なげく　なげきの　なげきを　なげく

長月　十月　詠　実綱師の

ながつきの　ながつきの　ながつきの
　　ながつきの　ながつきの　ながつきの
　　ながつきの　ながつきの　ながつきの
　　ながつきの　ながつきの　ながつきの

ながつきの　ながつきの　ながつきの
　　ながつきの　ながつきの　ながつきの
　　ながつきの　ながつきの　ながつきの
　　ながつきの　ながつきの　ながつきの

ながつきの　ながつきの　ながつきの
　　ながつきの　ながつきの　ながつきの
　　ながつきの　ながつきの　ながつきの
　　ながつきの　ながつきの　ながつきの

ながつきの　ながつきの　ながつきの
　　ながつきの　ながつきの　ながつきの
　　ながつきの　ながつきの　ながつきの
　　ながつきの　ながつきの　ながつきの

ながつきの　ながつきの　ながつきの
　　ながつきの　ながつきの　ながつきの
　　ながつきの　ながつきの　ながつきの
　　ながつきの　ながつきの　ながつきの

ながつきの　ながつきの　ながつきの
　　ながつきの　ながつきの　ながつきの
　　ながつきの　ながつきの　ながつきの
　　ながつきの　ながつきの　ながつきの

山中為[illegible]りて伝ふる数年の秘[illegible]
小わ将義孝方[illegible]
ある事[illegible]
或人云山中男ふ女[illegible]
むとめ乃長[illegible]
[illegible]

清人しる説

[illegible]
[illegible]
[illegible]

天文十七年霜月日書之

釋雲秀寫

天文十七年霜月日書之

釋[illegible]